

特集にあたって

高井 英造 (㈱フレームワークス)

職業としてのOR、というテーマを掲げさせていたが、我が国において、ORパーソンが職業的専門領域として広く一般に認められているかという、正直なところ、はなはだ心許ない状況であると言わざるを得ないであろう。この特集はこのような環境の中で、ORを「なりわい」として生きていくという選択をされ、現役のスペシャリストとして活躍されている方々にご登場いただいた。いずれも、それぞれの立場で、さまざまな断面からORを職業とする上での苦心の軌跡を率直に語って下さっていて、大変示唆に富む興味深い特集号になったと思う。原稿を読ませて頂いて感じたことは、執筆して下さった方々は例外なく自分の専門が本当に好きなのだということ、基本的に前向きで、楽天的な人たちだということである。これはORを職業として続けていける鍵かも知れない。

それにしても、オペレーションズ・リサーチを生業とするのは、仕事の内容に関係ないところでも結構やっかいなことではある。第一に、人に説明して分かってもらえない。仕事がORで、それはどういうものかを説明した後で「それで会社では何をやっているのか」と質問されたことも再三である。子供に説明しにくい職業であることも間違いない。二番目もどなたかが書いておられるが、ORばかりを続けていては大企業ではあまり出世は出来ないだろうということである。書いて気がついたのだが、実は見回してみると、OR出身で大企業の経営陣に名を連ねている人も少なくない。ORの実践を身につけておくと、広い視野で、しかも数字の裏付けをいとわずに仕事をするのが身にしみているので、これはこれからのビジネスリーダーとして重要な素養になるだろうと思われる。そこで、いつか機会を見てそのような人たちの、「経営者としてみたOR」について特集を組みたいと考えているがいかがであろうか。

企業におけるORパーソンの認知ということを述べ

たが、一方で大学教育においては、我が国ではどちらかという研究者が研究者を育てるというニュアンスが強いように感じられる。もとより、基礎的な理論の習得は専門家として不可欠であることは当然であるが、実務や現場との距離感を理解しておくことも必要であろう。

この特集のきっかけは、寄稿者でもある伊倉氏から、米国で学生向けに行われている“OR as a Profession”というセッションを研究発表大会でやってみてはどうだろうか、というご提案を頂いたことにある。いずれは学生に向けた特別セッションを実現したいと考えているが、この特集を「職業としての」ORを意識した教育を考える契機としていただければ幸いである。

寄稿者の皆さんが、実に的確なタイトルを付けて下さっているのです。ここでは、内容紹介は省いていくつかのフレーズをご紹介しますことにしたい。ここにあげた以外にも経験に基づく興味深い言葉を発見して頂けると思う。

- ・「求められる問題解決に対して自由に“OR”の枠組みを広げ、多様な理論や技術を組み合わせる柔軟に取り込んでゆくアプローチが必要」
- ・「一つのモデル化の筋を絶やさずに続ける事により、チャンスが生まれることを理解していただきたい」
- ・「仕事の場面でとびかっている“最適化”という言い回しは全くORと関係なく使われている場合がほとんどであり大変曲者（くせもの）である」
- ・「なまじORの教育を受けているばかりに考え方がワンパターンになってしまう危険もありうるのではないか」
- ・「改めて注記したい点は、数理的な知識よりも常識的なビジネス感覚の必要性である」
- ・「多くの企業でこれからもORが使い続けられて、その実践が事例として情報共有されることが非常に重要である」